

## 福山市小中一貫教育推進懇話会（第3回）会議録

日 時 2013年（平成25年）1月29日（火）  
午後10時

場 所 福山市役所 東棟3階 304会議室

出席委員 10名

出席又は欠席	名 前
出席	小 原 友 行
出席	貝 田 哲 郎
出席	小 森 密 寿
出席	山 崎 俊 章
出席	飛 田 洋 悟
出席	小 野 方 資
出席	松 本 茂 太 郎
出席	藤 本 和 士
出席	小 野 明 人
出席	岡 本 康 成

会議に出席した事務局職員

教育長	吉 川 信 政
管理部長	石 井 康 夫
社会教育部長	山 口 善 弘
総務課長	西 頭 智 彦
学事課長	宮 本 浩 嗣
指導課長	伊 原 秀 夫
指導課教科指導担当課長	宇 根 一 成

- 1 開会  
・吉川教育長挨拶

- 2 報告・説明
- (1) 第2回懇話会の確認（意見集約）
  - (2) 小中一貫教育に係る取組状況
    - ① 中学校区の主な取組
    - ② 教育委員会の主な取組
      - ・教職員研修
      - ・学校展覧会
  - (3) (仮称) 福山ふるさと学習
    - ① 生活科・総合的な学習の時間の現状
    - ② (仮称) 福山ふるさと学習(案)

《質疑等》

(小原座長) 第2回の懇話会で子ども達に期待する姿として4つの「C」を言ったと思いますが、最近もう1つの「C」であるチャレンジを入れたら良いのではないかと考えています。福山ではコミュニケーション、コラボレーション、クリエーションを持って新しいことに挑戦するという意味でもチャレンジを含んだ5つの「C」を掲げることも大切ではないでしょうか。元気づけるという意味でも学習意欲に関係してくると思います。

- 3 協議  
テーマ「福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てるために、福山の子どもたちに取り組みせたい教育活動」

《質疑等》

(飛田委員) 福山の子ども達に取り組みせたい教育活動としては、1つの柱は普遍的な事柄である知・徳・体であり、特に規範意識のようなものを子ども達に確実に持たせたいと思います。また、自分の故郷である福山に愛着や誇りを持たせたるために、ふるさと学習をはじめとして、社会に出ても自分の故郷に自信を持って頑張れる力を身に付けさせたいと思います。

(小原座長) 規範意識や故郷への誇りを持つ意識等は、資料に掲載されているアンケートの中にも上位に入っています。上位にあるマナーや道徳心、将来の夢や希望、基礎学力などは合わせるとキャリア教育と同じものになります。そのような意味では市民も普遍的なものを求められているのではないかと思いますし、懇話会においても同様だと思います。

(山崎委員) 南小学校で生活科や総合的な学習の時間で、花や野菜を育てる体験を通して学んだり、ばら公園や緑町公園、中央公園などがある福山の中心部である自分のまちの良さを学習しています。また、6年生では能の体験を通して伝統文化を学ぶなど、自分たちが住んでいる地域にある様々な施設を知り、地域との繋がりを感じているのではないかと思います。子ども達が一緒に地域を感じながら働くことは、ふるさと学習に繋がる内容ではないかと考えています。小中一貫の取組として南小学校で

は城南中学校の生徒と一緒に地域の公園清掃や挨拶運動を行っています。学年を越えて取り組むことで、お互いの良さを感じることができているのではないかと思います。カリキュラムの作成においても、一番子ども達に付けたい力を意識して進めることが大切であると考えます。

(小森委員)

子ども達には挨拶ができるようになって欲しいと思います。私はPTA連合会の役員をしており、小中学校の市内一斉挨拶運動にも参加しました。挨拶運動の日だけでなく、日々当然のように挨拶が出来る子ども達であって欲しいと思いますし、そのことを身につけて欲しいと思います。挨拶はコミュニケーション力にも繋がってくると思います。学校だけでなく地域でも挨拶することで、お互いに話ができるようになり、地域の方が学校以外でも福山について教えて貰える先生になっていただけなのではないでしょうか。中学生になってくると、挨拶を返さない生徒も増えてきますが、挨拶がしっかりとできるようになり、挨拶が行き交うまちになって欲しいと思います。

(小原座長)

先日、ある会議に出席した時に、教員を目指している学生が、環境整備のために大学に入って来られている障がいのある方に対して、感謝の言葉をかけていたのですが、大学教員はほとんど行っていませんでした。教員を育てるための大学教員がこれで良いのかと思いました。子どもだけでなく大人も挨拶をするような文化が必要なのではないかと思います。挨拶ができる福山市に変わっていくという目標も分かりやすく良いと思います。

(小野明委員)

5つの「C」の話がありましたが、コラボレーションのために他の人と仲良くするためのスキルを学校教育の中にじっくり取り入れて欲しいと思います。日本人は他人との対話が非常に下手であると良く言われています。じっくり聞いて、その内容を受け止めて話す力は、大人になっても大変重要な力になってくると思います。その力を育てるために、学校の授業に様々な手法で取り入れていただきたいと思います。具体的な手法については、全員で考えていく必要のある課題であると思います。

また、地域と生徒達のつながりとして、お年寄りを訪問するような活動の機会を夏休みの体験等、学校活動の中に取り入れ、福祉に関わる体験をして欲しいと思います。

以前、西部地区で民生委員と警察で防犯の取組がありました。取組期間は短かったのですが、署長の指導・指揮がしっかりとっていて、周囲に分かり易いものでした。今まで、福祉に関わっていなかった警察の方まで意識していただけるようになりました。学校でも校長がはっきりと方針を立てて、しっかりと発信することが牽引する力になると思います。

(小原座長)

コラボレーションは漢字で書けば、ある1つの目的に向かって力を合わせて取り組む「共同」と、様々な考えを持つ者が集まって議論しながら進めることで、考えられないような新たなアイデアが生まれてくるという「協同」、文化や言葉の違う者が集まって議論し合う中で、新たなアイデアだけでなく対立を乗り越えていくという「協働」があります。協働は争っている片側が勝つのではなく、両者が勝てるような新たな解決策を見出していくことですので、小学校と中学校では文化が違いますが、小中の先生と一緒に研修を受けることで、新しい何かが生まれてくるという意味で協働という言葉が使われています。

(岡本委員)

清掃や伝統芸能など地域の活動の中に率先的に参加することで、子ども達は育つと思います。しかし現在は、地域離れというものがどの学区でも起きており、課題になっていると思います。子ども会でも、4年前は2万4千であった子どもの会員

数が今では2万程度になっています。少子化の影響もあると思いますが、地域離れも加速しており課題ではないかと思います。

(小原座長)

小中一貫・連携教育の原点は目的ではなく、中学校区を中心とした地域コミュニティが子ども達の成長に責任を持って育てていくという発想によるものです。そのような意味では地域の子どもの会の活性化も小中連携教育のベースになっていくものですので、ベースがしっかりとしていないと小中一貫や連携は進みません。地域コミュニティを大事することは大切なことであると思います。

これまでの意見で挙げられた挨拶は、学校教育の前の家庭教育であり、学校・家庭・地域が連携した教育という意味で、地域全体での教育として考えていく必要がありますね。

(松本委員)

小中一貫では産業の活性化や福山市内にどのような企業があるかなど、歴史についてしっかりと学んで欲しいと思います。自分自身の経験として、海外へ出張した際に取引先と食事をする機会がありました。その場で話題になった内容が歴史のことでした。自分の住んでいる地域を聞かれた時に福山城やばらの花、産業の事を話しました。今後、海外へ行く者が増加すると思いますが、歴史や地場産業について、知識を吸収しやすい小さな頃に教えることが大切だと思います。小学校や中学校で学んだ地元のことはしっかりと覚えていると思いますので、大人になって海外へ出た時に役立つのではないのでしょうか。

(小原座長)

福山の子ども達に9年間で学ばせたいことは、福山の事についてであると思います。福山を学んでいることが、実は世界に繋がっているという意味では、世界に出た時、地域の事を学んでいることが後に役立ってくるようになるという意見ですので、福山の事を考える際に内へ内へと考えてしまいがちですが、世界を意識することも大切であるという指摘であると思います。

ローカルであると同時にグローバルであり、故郷密着型であるけれども、非常に先進的な取組を行うと捉えることが大切ではないのでしょうか。

(藤本委員)

小中一貫もしくは連携の9年間でどのような子どもの育て方をするかということについて、学校ですから「学ぶ」ということはもちろん大切ですが、「教える」ということも教える必要があるのではないのでしょうか。中学生が小学生に教えるという進め方を行えば繋がりが生まれてくるのではないかと思います。以前は小学生には中学生が、中学生には高校生がというような、先輩に教えてもらうことあったと思いますが、段々と無くなってきているのではないかと思います。日本は小学校、中学校の9年間で1つとして考えていますが、他の国では小学校から高等学校までの12年間で1つに考えている地域もあるようです。福山市内にも走島や山野など、既に小中一貫を行わなければ、学校が成立し難い地域もありますので取組を広げることは難しいことではないと思います。

また、小森委員からの意見で学年が上がるにつれて挨拶しなくなるということについてですが、確かに挨拶をすることへの恥ずかしさもあると思いますが、年上の者がしっかりと挨拶を行えば、年下の者もそれに倣って自然とできるようになると思います。

小中一貫の9年間でも「教える」ということができるようになれば良いのではないかと思います。

(小原座長)

福山の子ども達に望む姿についてのアンケート資料の中にも、マナー・道徳心、将来の夢や希望、基礎学力、コミュニケーションなどがあり、福山への愛着や誇りについても、今回、生活科や総合的な学習の時間の中で、ふるさと学習というものが出てきています。時数については週に2、3時間のうちの一部になりますの

で、その時間だけの取組では不十分だと思います。大部分は教科等の時間になりますので、その中でも子ども達にコミュニケーションや表現力を大事にし、故郷に誇りを持てるような教材を取り入れた学習に取り組むことが大切だと思います。挨拶についても、学校教育だけでなく、家庭や地域と一体となり、多角的な取組が必要だと思います。

(藤本委員) 説明のあったふるさと学習のカリキュラムは良く出来ていると思います。福山市はものづくりの町ですので、小学校6年生から中学校1年生の考え方が大きく変わってくる時期にしっかりと学んで欲しいと思います。

(小原座長) 福山市はものづくりという視点を大切にしたいという意見ですね。ものづくり意識は国際化対応や広島県、国全体の柱になっています。そのような意味では福山市は実現可能な絶好の場所になると思います。

(貝田委員) 子ども達は親のうしろ姿を見て育ちます。戦後67年になりますが、今の学校教育、家庭教育あるいは社会教育で何が欠けたために現在のような世の中になったのかということ考えた時に、最低限のルールを守る等の道徳的な教育が大人の責任として十分に伝えることができていなかったのではないかと思います。東日本大震災から学び、人としてどのように生きるべきかということについて、成長過程にある少年期でしっかりと考える教育が必要なのではないかと思います。目に見えるものだけでなく、目に見えないものにも目を向ける必要があるのではないのでしょうか。家に帰ったら靴を脱いで揃える、朝起きたら家族に挨拶をする等の当たり前前が案外できていないのではないかと思います。

(小原座長) 道徳や特活というものは学習指導要領では豊かな心を育むものであり、自分自身に関わること、人との関わり、社会への貢献というものが特活で大切にされていることです。そのような意味では福山市が目指しているものと基本的には同じであると思います。従って、ふるさと学習を生活科や総合的な学習の時間だけで行うのではなく、教育課程全体でしっかりと行うことが大切であると思います。

(小野<sub>方</sub>委員) 生活科・総合的な学習の時間で活用されている主な地域素材が資料に記載されていますが、神辺や松永など広い地域に様々な教材があり、多様性に富んでいるのだと感じました。小中一貫教育は手段であり、それぞれの地域特性を活かして、地域の繋がりが育ち、その地域の大人たちのうしろ姿を見て学習していくということであれば、もっと素材があるのではないかと思います。

愛着と誇りというキーワードがありますが、地域によって様々な愛着や誇りがあっても良いのではないのでしょうか。多様であり、地域ごとの愛着や誇りがあるからこそ意見を戦わせたり、良いものを創っていくという在り方があっても良いのではないかと思います。愛着や誇りを型にはめてしまうことによって、「クリエーション」を壊してしまうことは一番恐ろしいことだと思いますので、多様な文化などを学ぶというのは面白い取組だと思います。

1つ質問なのですが、評価はどのように行う予定ですか。

(教科指導担当課長) 点数的な評価は行わず、つけたい力を項目として位置づけ、それに対しての子ども達の変化を記述し、評価する予定です。

(小原座長) 総合的な学習の時間は各学校がめざす子ども像に基づいて特色ある学校づくりを展開するために設けられた時間ですので、目標に関しては各学校が創意工夫して設定することができますが、教科に相当するものですので評価をしなければなりません。評価の観点についてですが、学習指導要録に決められている他の教科とは異なる

り、総合的な学習の時間では観点を各学校が作成・設定できます。そして、作成・設定した観点について力が付いているかを様々な手段を用いて測定し、評価していきます。今回示されているふるさと学習には愛着や誇りについての観点が含まれていませんので、ふるさと福山についての目標や観点を取り入れる必要があると思います。

(小野<sub>方</sub>委員)

「ふるさと学習カリキュラム(案)」の資料の中学校3年生では「より良い福山を目指して」を提言として、環境、福祉、教育、防災、交通等のテーマで学習に取り組むことになっていますが、これは3年生で初めて取り組むようになるのですか。

また、コミュニケーションやクリエーションについてアウトプット型の学習であれば、小学校6年生からでも十分取り組めるのではないかと思います。実施時期をもう少し前倒しても良いのではないのでしょうか。大学でもゼミでポスター発表を行います。ポスター発表が1つの媒体となり、生徒がしっかりと学習に取り組むようになることもあります。アウトプット型の学習を取り入れることができれば、意見を戦わせる等の学習効果も期待できると思います。

(小原座長)

より良い福山についての学習時期を中期に前倒しし、後期ではより良い日本や世界について学習を行う等、もう少し内容を拡充しても良いのではないのでしょうか。

ふるさと学習の内容がものづくり、福山の歴史・伝統、住みよい福山となっていますが、これからの社会をどのように構築し、形成していくかという内容が含まれていることがカリキュラムの特徴とするならば、それはサービスラーニングやプロジェクトラーニングと呼ばれているものです。子ども達が学校で学んだものを使って、地域のコミュニティーをより良くするために外に出て、何ができるかということを考えるものです。今回のふるさと学習ではその部分を大きな柱としている特徴がありますね。地域ボランティアとして、地域の子供達が参加することがカリキュラムの中に位置付けてくると地域連携がもっと必要になってきます。またそのことが今回のふるさと学習の大きな特徴でもあると思いますが、実際に実施することは容易ではないと思います。

また、指導する側である先生の育成も必要になってきますね。

(小野<sub>明</sub>委員)

福山市で年に1回、歩け歩け会を実施するのですが、途中で神辺の砂留めや菅茶山など、道中で通過する場所について、その地域に詳しい方が説明をしてくれます。子どもにとってはもちろんですが、先生にとっても良い教材になるのではないのでしょうか。

現在、物事が何でもマニュアル化されており、決められたスケジュールで決められた物事をするようになっていますが、以前は何もない状態から全て自らの手で作っていき、その経験が今の日本を作ったという意見も聞きます。今の子ども達は与えられたものから考えることに慣れすぎていると思いますので、何か解消できるような工夫をする必要があると思います。

(小原座長)

今回の計画についてもですが、まずフレームを作ってから内容を加えながら特色を出し、福山を素材にして子ども達に学ばせようというカリキュラムになっていると思います。しかし本当は子ども達自身が福山を学びたくなり、主体的に学習できるようにならなければ、大人になってもエピソードとして記憶に残り、福山について語るができるようにはならないと思います。

以前、指導のために坪生小学校に伺っていましたが、その時に地域の郷土史家の人子ども達に情熱的に話をされていました。子ども達はわくわくして、その話を待ち望み、意欲を持って調べていました。子ども達に主体性が出てくるように取り組まなければ、小野委員の意見にもあった自らの手で創るという状況を実現さ

せることは難しいと思います。

(藤本委員) 小中一貫の中で、中学校の生徒が小学校の児童に教えるということが大切であり、教えるためには、自ら調べて学習する必要があります。教えるということは主体的に勉強することに繋がるのではないかと思います。私自身も以前、子どもにバドミントンを教えていましたが、そのために自分で勉強していないと教えることはできなかったと思います。また、私自身が教えてもらった時に、先輩も勉強を教えるために勉強しており、その姿を見ていました。このような姿が物事を学ぼうとすることに繋がるのではないかと思います。

(小原座長) 中学生が小学生の教材、先生になるということや、交流の場を設けるということですね。

(山崎委員) 学校現場の立場からの意見になりますが、生活科や総合的な学習の時間について各学校は様々な工夫をしながら取組を進めています。しかし、子ども達が本当に燃えるときは、地域の方に自分たちが説明をしたり、学習したことを発表する場だと思います。南小学校では意識的にそのような場を設けています。

例えば、学区の方が集まる文化祭等の場で、子ども達が学習した伝統芸能や、自分たちが住んでいる町のことについて地域の方に聞いて調べた内容等を発表しています。先生から聞いたことや、インターネット、書籍等で調べた内容だけでは、子ども達自身の力にはなりません。発表に苦手意識を持っている子どももいますが、地域の方へ発表する場になると努力する子どももいます。学校教育と地域の関わりについて様々に言われていますが、どのようにしてその場を設けるかということが大切だと思います。

また、学校に外国語指導助手という外国の先生が来校して、英語の授業に参加してくれていますが、先生は其中で最初に自分の家族や故郷について写真を載せて説明してくれます。子ども達や教員が最初の出会いの時に同様の事ができるかというところ、出来ませんし、下手だと思います。自分を語れるということが大きなポイントであると思います。子ども達が体験して実感することが大切であると思いますし、その先に感動があり、感動することで自分のものにしていくのではないかと思います。

(松本委員) 海外に行くと、会社などに家族の写真を飾っていますが、日本人はあまりしないと思います。最近は日本の家庭でもコミュニケーションがとれるようになってきているかもしれませんが、海外の方が家庭をとっても大事にされているのに対して、どちらかと言えば、日本人は会社を大事にしているように感じます。

(小原座長) 4年程前に福山市中心部の小学校に総合学習の指導に伺ったことがあります。より良い故郷にするためにというコンセプトで、3年生は自分たちの地域を良くしたいということで、通学路を花で飾るという取組をしました。4年生は自分たちの学校を良くしたいということで、掃除等に取り組んでいました。取組が終わると3年生の自己肯定感が非常に高くなっていました。外で活動する3年生は、周囲から感謝の言葉をかけられますが、校内で活動する4年生は周囲から褒められることが無かったことが要因でした。

やはり、外に出て地域から認められたり、世の中から褒められるという事はモチベーションを上げる要因になります。子ども達が学校外で福山を良くするため取り組むという事は、将来に何かを残すのだと思います。そのようなエピソードが無いと、知識は有っても、海外等で自分の故郷について、物語としては話せないと思います。そのような意味では、ふるさと学習は子ども達が生まれ育った故郷を素材にして希望の物語を見つけることが出来るような取組を目指すことが大切だと思います。

す。

(貝田委員) 学校選択制はクラブ活動や教育内容等によって通う学校を選ぶことができるものです。学校によって利用状況に差異があると思いますが、制度を利用する子ども達は広い意味では福山という故郷にいたのですが、小さな意味での故郷を離れることにもなると思います。そのような場合に、どのように教育内容を作り上げていくかということを考えておく必要があると思います。

(小原座長) 広島市は小中一貫教育を推進していますが、小学校の上位層の児童は私学に進みます。中学校は中位層から新たにリーダーを作っていかなければなりません。如何にして克服していくかということが大きな課題になっており、様々な取組を実施しています。そういう意味では福山市においても、小中連携教育の結果として地元の学校に行くことが、将来にとって一番素晴らしいことであると考えられるような結果が出る取組、またそれに向けて努力しようとしている取組等、捉え方を変えるとすることも必要なのではないのでしょうか。

やはり、中学生が輝いていないと小学生はその中学校に行きたいとは思いません。小学生が行きたいと思えるような中学校になることが大切だと思いますし、福山市ではその芽が少しずつ芽吹いてきているのではないかと思います。

(山崎委員) 各学校によって状況は違いますが、栽培活動や清掃活動、挨拶運動を続けています。特に一昨年から校区で共通の土俵に立って取り組んでいこうということで、教育委員会から地域テーマ募金の活用について紹介がありましたので、来年度から地域にも募金を募り、取組の紹介を行おうと考えています。その中で中学生に一番輝いてもらいたいということで、中学校で先輩の話聞くなど、将来の展望に繋がるような取組を行おうと考えています。

(飛田委員) 福山に愛着と誇りをもつというテーマなのですが、まず、自分の学校に愛着や誇りを持ってもらい、そして地域や福山へ愛着を持つようになってもらいたいと思います。

その時にどのようなことを行えば、生徒がこの学校に通って良かったと思えるのかということを考えると、学校生活の中で感動できるようなことや、仲間との絆を確認できたこと、あるいは学校の伝統や文化など自慢できることがあったかどうか等を生徒が分かるような取組を行っていく必要があるのではないかと思います。それらの積み重ねによって、自分の学校を好きになり、誇りを持って卒業できるのではないかと思います。

更に地域や福山に対して誇りを持ったりするために、今回のようなふるさと学習のカリキュラムがあることは、学校側としてはありがたいのと同時に、この学習で地域のエピソードを上手く取り入れることができるのかということが大切になってくるのではないかと思います。

私自身、社会科の研究部会に所属していますが、昨年末に沼隈町の山本瀧之助についてフィールドワーク等の調査を行いました。素晴らしい人物であることが分かりましたし、もっと知りたいと思うようになりました。子どもが地域の中で本当に感動できるようなことを学校が見つけ、取り組ませることで福山を好きになってくるのではないかと思います。今回提示されているふるさと学習は大枠を示しているものだと思いますので、これをベースに各学校の地域性を活かして取り組むことが重要だと思います。

また、先週、新春の書初め展の表彰式が行われました。私も参加していたのですが、表彰を受ける幼稚園の子ども達が壇上で来賓にまで向かって礼をしており大変驚きました。最初に大人が表彰を受けている姿をしっかり見て、真似たのだと思います。返事や礼儀を身につけさせるためには、やはり大人たちが見本を見せなければ



ばならず、学校では教員が率先して取り組まなければならないと改めて感じました。

(小原座長)

先ほどの意見で共通していたことは、学校や地域に誇りを持つことは、児童や生徒が主体となって、課題等を協力して乗り越えた経過があった場合に感動が生まれ、そのことが誇りや愛着のベースになるのではないかと。また、そのためには故郷を扱った学習をするだけでなく、感動が生まれるような体験活動を行うために、どのような取組を行えば良いかということを考えることが必要ではないかという意見であったと思います。先ほど教育長に最近中学校区で奇跡だと思えるようなことがあったかについて伺ったところ、いろいろと話していただきました。福山市でも何かが始まっているのかもしれない。

(岡本委員)

やはり、全員でやりきった達成感が誇りや協働の意識を持つことにつながると思います。子ども会では夏に芦田川の一斉清掃を行っています。全学区の低学年から高学年の子ども達が1300人程度集まり、清掃を行うのですが、最初参加した低学年の子どもが高学年になって、低学年の子どもにもゴミの分別や危険な箇所等について教えていました。回収する時に、拾ったたくさんのゴミを自慢げに見せてくれる子ども達もいます。学区を越えて、全員が同じ目標を掲げて取り組み、達成するという気持ちが一番大事ではないかと思います。

(小原座長)

1点目は、本日の資料にもありますが、学校教育の前期・中期・後期に合わせたふるさと学習のカリキュラムの詳細を作ろうとされています。このことは大変良いことだと思いますが、ある意味では福山という枠の画一化になり、子ども達や先生の学ぶ意欲を削ぎかねません。総合的な学習は各中学校区で、より地域密着型で創意工夫していくものだと思います。また、詳細のカリキュラム作成は難しく、作成することにエネルギーを費やしてしまい、より重要なカリキュラムを使っていくことにエネルギーが回らなくなります。

そのような意味では、外枠はきめ細かく作らず、前期・中期・後期において、それぞれどのような力を付けて欲しいかという目標を示すような福山型を作られてはどうでしょうか。これは、研究開発校や特区ではなく、現行の学習指導要領の中で福山の独自性を生かそうとするもので、そのような方向での新しさを求めても良いのではないかと思います。特定の学年で、特定の人物等について学ぶという学習方法では、各学校で掘り起こした教材が出てこなくなります。目標別や観点別で作成し、中学校卒業時にはこのような力を身に付けて欲しいということを示すことに留め、各学校での創意工夫を促す方が良いのではないかと思います。

2点目ですが、義務教育というものは先生次第だと思います。先生がその気になって総合学習に取り組めば、子どももその気になります。大人や地域がその気になれば、学校や家庭もその気になりますので、小中一貫型の総合学習のカリキュラムを作るのと同時に、カリキュラムを通して先生を育てていくような、もう1つのカリキュラムを作る必要があるのではないかと思います。

先生方が一番取り組まなければならないふるさと学習の教材研究は先生自身がふるさと学習に取り組んでみることにしたいと思います。どれほど地域の協力があっても、最後は先生が最大の図書館です。先生がふるさとを深く知っているということが、テーマになるのではないかと思いますので、先生を育てていくカリキュラムについても研修会等で考えていく必要があるのではないかと思います。先生が講演会等を聞くだけでなく、先生自らが作り上げるようなものになれば良いものができるのではないかと思います。

3点目ですが、福山で生まれ育った子ども達が福山を勉強することを通して、社会や世界をより良くするような志ある学びが大切です。地域を良くしていくことは、世界を良くしていく練習をしているようなものですので、子ども達が地域に出

て行くような取組が必要だと思えます。なかなか被災地である福島県へ行って復興に協力することはできないと思えますが、その考え方を地域の中で実践していくことは復興に協力することと同じだと思えますので、地域の課題の解決や貢献、良さを発信していくサービスラーニングがふるさと学習の大きな特色になれば、徐々にですが確実に福山で生まれ育って良かったと思えるような子ども達が育つのではないかと期待しています。

#### 4 まとめ

・次年度の方向性

(主な協議内容)

(1) 小中一貫教育2年次の取組について

(2) 「(仮称)福山ふるさと学習」の取組について